

第10号の刊行にあたって

高杉巴彦 (立命館大学国際平和ミュージアム館長)

2007年春の立命館大学国際平和ミュージアム紀要『立命館平和研究』第8号から、この紀要の性格を、展示施設としての博物館についての研究・調査のみならず、研究誌としての色合いを強めていくこととし、2008年3月の第9号から、投稿規程と査読体制を確立した。

それは、2006年7月21日制定の「立命館憲章」において、学園の活動の使命を明確にしたことに拠るものがおおきく、そこでは建学精神「自由と清新」と戦後の教学理念「平和と民主主義」を確認するとともに、「立命館は、アジア太平洋地域に位置する日本の学園として、歴史を誠実に見つめ、国際相互理解を通じた多文化共生の学園を確立する。」「立命館は、教育・研究および文化・スポーツ活動を通じて信頼と連帯を育み、地域に根ざし、国際社会に開かれた学園づくりを進める。」「立命館は、人類の未来を切り拓くために、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類的諸課題の解明に邁進する。」として、「世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する。」ことが期待された。

さらに基本政策としての「中期計画」において、国際平和ミュージアムのあり方として、展示施設である博物館としての展開とともに、学園の平和教育センターとしての役割りと、国際的な平和研究センターとしての方向性が提示されたことが重要であった。

こうした観点から見たときに、10月に私たち国際平和ミュージアムと京都造形芸術大学、広島平和記念資料館で、5日間にわたって開催した第6回国際平和博物館会議は、世界の平和博物館の理論的・実践的到達点を踏まえて、その転換点を形成する水準に達する成果を挙げ得たものであり、特に「平和のための博物館国際ネットワーク」で立命館大学国際平和ミュージアムが果たす役割りが増大し、平和研究・平和教育進展の契機を形成するとともに、博物館施設としての機能強化の議論も進んだ。

したがって今回の第10号については、その国際会議やその目的に関連する論文や報告が特徴的であり、平和教育についての論文や研究ノートも目立っている。本学教員や本ミュージアム関係者からの研究・調査に加えて、学外からの論文・報告等が4本ある。

さらに2008年12月5日に亡くなられた、立命館国際平和ミュージアム初代館長の加藤周一さん追悼の館長・名誉館長声明や事業報告も掲載してある。また第6回国際平和博物館会議については、詳細報告は『報告集』に委ねるとして、概括的総括文書を掲載してある。

今後、紀要『立命館平和研究』を研究・教育における水準の高いものとしつつ、社会教育施設としての展示機能や学習機能向上のための論文や報告を掲載する媒体として、高水準かつ有用性を担保する努力をしていく所存である。